



**料理教室** ～かんたん酢で作る春野菜のちらし  
寿司とマリネ、餅粉イチゴ大福～

- ◆日時 4月23日(土)午前の部 10時、午後の部 13時30分
- ◆場所 氷川町公民館 調理室
- ◆参加費 500円(当日徴収)
- ◆申込方法 4月15日(金)までに電話にて申込み(定員10人)
- ◆持参物 エプロン、三角巾、マスク、タオル、保冷バッグ
- ◆申込先 地域おこし協力隊(農業振興課内) ☎52-5854



**地域おこし協力隊  
活動レポート** ⑬



▲地域おこし協力隊  
Instagram

氷川町産農産物のPRと交通安全を兼ねて、今年も小学1年生に「れんこんこんにゃく」を作っています。  
規格外のれんこんを洗い、スライスし天日干しして乾燥させた後、1つずつ筆で色を塗り、レジンを付けて仕上げしていきます。  
製作しているところのりな形があつて面白く、世界に1つだけのオリジナルれんこんキーホルダーができます。  
地域おこし協力隊の「のぼり旗」ができました。今後いろいろな場所で活用していきます。

**「人が尊重され、生きがいを感じるあたたかい町」  
人権啓発コーナー**

4月は、新学期・新入生・新社会人。活躍が期待されます。新しい生活の中で「夢と希望」に満ちあふれています。新しい職場での出会い。地域での出会い。  
気持ちにゆとりが持てるように、出会いのあいさつや困った時など、進んで声を出してみましよう。

- ・おはようございます
- ・いってきます(いってらっしゃい)
- ・ただいま
- ・おかえりなさい
- ・おつかれさまです
- ・ご帰るついでです
- 困った時は「うなで教えてください」
- 互いに励まし合い、「人が尊重され、生きがいを感じるあたたかい町づくり」をしましょう。

☎52-58600  
生涯学習課 生涯学習係



▲今年もハトのお母さんが卵の「ふか」にがんばっています



**八火図書館 だより**

4月23日～5月12日は「こどもの読書週間」です。  
64回目となる今年の標語は、「ひとみキラキラ本にときどき」です。  
この機会にぜひ家族と一緒に読書を楽しみ、たくさんのおきどきをする本と出会ってみませんか。

新着図書	
一般書	児童書
角野栄子の毎日いろいろ 角野 栄子/著	あんみつひめさま さとう めぐみ/作・絵
ブラックボックス 砂川 文次/著	ポップポーン たまむら さちこ/著
その日まで 瀬戸内 寂聴/著	しんぱいなことがありません! 工藤 純子/作
世界のサラダ図鑑 佐藤 政人/著	3分間サイバル 栗生 こずえ/作

問 八火図書館 ☎62-3489



**『角野栄子の毎日いろいろ』(KADOKAWA)**  
家の壁のほとんどを占めるたくさんの本棚。「魔女の宅急便」をはじめ多くの児童文学の名作を生み出してきた、作家角野栄子の美しい暮らしをあますことなく紹介する、人生のお手本にしたい一冊!

**令和3年度によく読まれた本**

- ◆お探し物は図書室まで
- ◆52ヘルツのフジラたち
- ◆犬がいた季節
- ◆逆ソクラテス
- ◆そして、パトンは渡された

**町民文芸**

**短歌**

二十羽のメジロ集団押し寄せる  
お前達には狭い庭だよ  
西上宮 村内 一誠

石ばしる立神峡の淵碧し  
いにしえ人は龍棲むと言ふ  
北野津 井田 道寛

おとなしく優しい姉は雪椿  
唄って生きる九十五年  
西野津 古崎スエノ

採血の針さす血管細くして  
探すナースの懸命なり  
西野津 古崎 栄子

**俳句**

庭の王真紅キリシマ咲き誇る  
西上宮 村内 一誠

春暁や有為の奥山遠く見ゆ  
北野津 井田 道寛

雪降りて農を休みて読書かな  
西野津 古崎スエノ

梅咲くや庭中梅香春兆し  
西野津 古崎 栄子

**投稿先** 〒869-4814 氷川町島地642番地 企画財政課 企画係 ☎52-5850

**投稿について**  
・誤字防止のため楷書で記入し、漢字には全て読みがなをふって投稿してください。  
・電話番号を記載してください。  
・毎月5日必着

**「雪国」VS「山の音」**

法道寺 本田 花風

三度目の雪国を訪れる汽車の中「島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろ動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えてある、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなきのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうで、不思議に思いながら、鼻につけて臭いを匂いを嗅いでみたりしてあだが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の眼がはきり浮き出たのだった。彼は驚いて声をあげさうになった。しかしそれは彼が心を速くへやつてゐたからで、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が写つたのだった。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明かりがついてゐる。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチームの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかったのだ。  
娘の片眼だけは返つて異様に美しくつたもの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさといふ風な旅愁顔を俄づくりして、掌でガラスをこすつた。」このシチュエーションを「長谷川泉」に解説させるとういう風になる。  
「川端の肉感性は、すでに批評家の間にたらい廻しにされた言葉であるが、彼は事実を赤裸々な様相において描かぬと同様、彼の肉体を描いたことは一度もなかった。裸形の前には常に戦々とした。」